

墮落論〔続墮落論〕

坂口安吾

青空文庫

敗戦後国民の道義たいはい頹はい廃はいせりというのだが、然しからば戦前の「健全」なる道義に復することが望ましきことなりや、賀すべきことなりや、私は最も然らずと思う。

私の生れ育つた新潟市は石油の産地であり、したがって石油成金の産地でもあるが、私が小学校のころ、中野貫一という成金の一人が産をなして後も大いに儉約けんやくであり、停車場から人力車に乗ると値がなにか高いので万代橋ぼんだいばしという橋の袂たもとまで歩いてきてそこで安い車を拾うという話を校長先生の訓辞おんじに於て幾度となくきかされたものであった。ところが先日郷里の人がきての話に、この話が今日では新津某という新しい石油成金の逸話に変わり、現

に尚^{なお}新潟市民の日常の教訓となり、生活の規範となっていることを知った。

百万長者が五十銭の車代を三十銭にねぎることが美德なりや。我等の日常お手本とすべき生活であるか。この話一つに就^つての問題ではない。問題はかかる話の底をつらぬく精神であり、生活のありかたである。

戦争中私は日本映画社というところで嘱^{しよくたく}託^{たく}をしていた。そのとき、やっぱり嘱託の一人にSという新聞^{しんぶん}聯合^{れんごう}の理事^{りじ}だか何かをしている威勢のいい男がいて、談論風発、吉川英治と佐^さ藤^{とう}紅^{こう}緑^{ろく}が日本で偉い文学者だとか、そういう大先生であるが、会議の席でこういう映画を作ったらよかろうと言って意見をのべ

た。その映画というのは老いたる農夫のゴツゴツ節くれた手とかツギハギの着物だとか、父から子へ子から孫へ伝えられる忍苦と耐乏の魂の象徴を綴り合せ映せという、なぜなら日本文化は農村文化でなければならず、農村文化から都会文化に移ったところに日本の墮落があり、今日の悲劇があるからだ、というのであった。

この話は会議の席では大いに反響をよんだもので専務（事実上の社長）などは大感服、僕をかえりみて、君あれを脚本にしないかなどと言われて、私は御辞退申上げるのに苦労したものであるが、この話とてもこの場かぎりの戦時中の一場の悪夢ではないだろう。戦争中は農村文化へかえれ、農村の魂へかえれ、というこ

とが絶叫しつづけられていたのであるが、それは一時の流行の思想であるとともに、日本大衆の精神でもあつた。

一口に農村文化というけれども、そもそも農村に文化があるか。盆踊りだのお祭礼風俗だの、耐乏精神だの本能的な貯蓄精神はあるかも知れぬが、文化の本質は進歩ということで、農村には進歩に關する毛一筋の影だにない。あるものは排他精神と、他へ對する不信、疑ぐり深い魂だけで、損得の執拗しつような計算が発達しているだけである。農村は淳朴じゆんぼくだという奇妙な言葉が無反省に使用せられてきたものだが、元來農村はその成立の始めから淳朴などという性格はなかつた。

大化改新以來、農村精神とは脱税を案出する不撓不屈ふたうふくくつの精神で、

浮浪人となつて脱税し、戸籍をごまかして脱税し、そして彼等農民達の小さな個々の悪戦苦闘の脱税行為が実は日本経済の結び目であり、それによつて莊園が起り、莊園が栄え、莊園が衰え、貴族が亡びて^{ほう}武士が興つた^{おこ}。農民達の税との戦い、その不撓不屈の脱税行為によつて日本の政治が變動し、日本の歴史が移り變つてゐる。人を見たら泥棒と思えというのが王朝の農村精神であり、事実群盜横行し、地頭はころんだときでも何か掴^{つか}んで起き上るといふ達人であるから、他への不信、排他精神というものは農村の魂であつた。彼等は常に受身である。自分の方からこうしたいとは言わず、又、言い得ない。その代り押しつけられた事柄を彼等独特のずるさによつて処理しておるので、そしてその受身のずる

さが、孜々^{しし}として、日本の歴史を動かしてきたのであった。

日本の農村は今日に於ても尚^{なお}奈良朝の農村である。今日諸方の農村に於^おける相似た民事裁判の例、境界のウネを五寸三寸ずつ動かして隣人を裏切り、証文なしで田を借りて返さず親友を裏切る、彼等は親友隣人を執拗に裏切りつづけているではないか。損得という利害の打算が生活の根^{こんてい}柢^いで、より高い精神への渴望、自我の内省と他の発見は農村の精神に見出すことができない。他の発見のないところに真実の文化が有りうべき筈^{はず}はない。自我の省察のないところに文化の有りうべき筈はない。

農村の美德は耐乏、忍苦の精神だという。乏しきに耐える精神などがなんで美德であるものか。必要は発明の母と言う。乏しき

に耐えず、不便に耐え得ず、必要を求めるところに発明が起り、文化が起り、進歩というものが行われてくるのである。日本の兵隊は耐乏の兵隊で、便利の機械は渴望されず、肉体の酷使耐乏がおうか謳歌せられて、兵器は発達せず、根柢的に作戦の基礎が欠けてしまつて、今日の無残極まる大敗北となつている。あに兵隊のみならずや。日本の精神そのものが耐乏の精神であり、変化を欲せず、進歩を欲せず、憧憬讚美が過去へむけられ、たまさかに現れいでる進歩的精神はこの耐乏的反動精神の一撃を受けて常に過去へ引き戻されてしまうのである。

必要は発明の母という。その必要をもとめる精神を日本ではナマクラの精神などと云い、耐乏を美德と称す。一里二里は歩けと

いう。五階六階へエレベーターアなどとはナマクラ千万の根性だという。機械に頼つて勤労精神を忘れるのは亡国のもとだという。すべてがあべこべなのだ。真理は偽らぬものである。即ち真理によつて復讐ふくしゅうせられ、肉体の勤労にたより、耐乏の精神にたよつて今日亡国の悲運をまねいたではないか。

ボタン一つ押し、ハンドルを廻まわすだけですむことを、一日中エイイ苦労して、汗の結晶だの勤労のよろこびなどと、馬鹿げた話である。しかも日本全体が、日本の根柢そのものが、かくの如く馬鹿げきつているのだ。

いまだに代議士諸公は天皇制について皇室の尊嚴などと馬鹿げきつたことを言い、大騒ぎをしている。天皇制というものは日本

歴史を貫く一つの制度ではあつたけれども、天皇の尊嚴というものは常に利用者の道具にすぎず、真に実在したためしはなかつた。

ふじわら
藤原氏や將軍家にとって何がために天皇制が必要であつたか。

何が故にゆえ彼等自身が最高の主権を握らなかつたか。それは彼等が自ら主権を握るよりも、天皇制が都合がよかつたからで、彼らは自分自身が天下に号令するよりも、天皇に号令させ、自分がまつきにその号令に服従してみせることによつて号令が更によく行きわたることを心得ていた。その天皇の号令とは天皇自身の意志ではなく、実は彼等の号令であり、彼等は自分の欲するところを天皇の名に於て行い、自分がま先ずまつきにその号令に服してみせる、自分が天皇に服す範を人民に押しつけることによつて、自

分の号令を押しつけるのである。

自分自らを神と称し絶対の尊嚴を人民に要求することは不可能だ。だが、自分が天皇にぬかざくことによつて天皇を神たらしめ、それを人民に押しつけることは可能なのである。そこで彼等は天皇の擁立ようりつを自分勝手にやりながら、天皇の前にぬかざき、自分がぬかざくことによつて天皇の尊嚴を人民に強要し、その尊嚴を利用して号令していた。

それは遠い歴史の藤原氏や武家のみの物語ではないのだ。見給え。この戦争がそうではないか。實際天皇は知らないのだ。命令してはいないのだ。ただ軍人の意志である。満洲まんしゅうの一角で事變の火の手があがつたという。北支の一角で火の手が切られたと

いう。はなはだ甚しい哉、かな総理大臣までその実相を告げ知らされていない。何たる軍部の専断横行であるか。しかもその軍人たるや、かくの如くに天皇をないがしろにし、根柢的に天皇を冒瀆ぼうとくしながら、盲目的に天皇を崇拜すうはいしているのである。ナンセンス！ ああナンセンス極まれり。しかもこれが日本歴史を一貫する天皇制真実の相であり、日本史の偽らざる実体なのである。

藤原氏の昔から、最も天皇を冒瀆する者が最も天皇を崇拜していた。彼等は真に骨の髄ずいから盲目的に崇拜し、同時に天皇をもてあそび、我が身の便利の道具とし、冒瀆の限りをつくしていた。現代に至るまで、そして、現在も尚、代議士諸公は天皇の尊嚴をうんぬん云々し、国民は又、概ねおおむそれを支持している。

昨年八月十五日、天皇の名によつて終戦となり、天皇によつて救われたと人々は言うけれども、日本歴史の証するところを見れば、常に天皇とはかかる非常の処理に対して日本歴史のあみだした獨創的な作品であり方策であり、奥の手であり、軍部はこの奥の手を本能的に知っており、我々国民又この奥の手を本能的に待ちかまえており、かくて軍部日本人合作の大詰おおづめの一幕が八月十五日となつた。

たえがたきを忍び、忍びがたきを忍んで、朕ちんの命令に服してくれという。すると国民は泣いて、外ほかならぬ陛下の命令だから、忍びがたいけれども忍んで負けよう、と言う。嘘をつけ！　嘘をつけ！　嘘をつけ！　嘘をつけ！

我等国民は戦争をやめたくて仕方がなかったのではないか。竹たけ槍やりをしごいて戦車に立ちむかい土人形の如くにバタバタ死ぬのが厭いやでたまらなかつたのではないか。戦争の終ることを最も切に欲していた。そのくせ、それが言えないのだ。そして大義名分と云い、又、天皇の命令という。忍びがたきを忍ぶという。何というカラクリだろう。惨みじめとも又なさけない歴史的だいぎまん大偽瞞ではないか。しかも我等はその偽瞞を知らぬ。天皇の停戦命令がなければ、実際戦車に体当りをし、厭々ながら勇壮に土人形となつてバタバタ死んだのだ。最も天皇を冒瀆する軍人が天皇を崇拜するが如くに、我々国民はさのみ天皇を崇拜しないが、天皇を利用することには狎なれており、その自らの狡こうかつ猾さ、大義名分というずる

い看板をさくらず、天皇の尊嚴の御利益ごりやくを謳歌している。何たるカラクリ、又、狡猾さであろうか。我々はこの歴史的カラクリに憑つかれ、そして、人間の、人性の、正しい姿を失ったのである。人間の、又人性の正しい姿とは何ぞや。欲するところを素直に欲し、厭な物を厭だと言う、要はただそれだけのことだ。好きなものを好きだという、好きな女を好きだという、大義名分だの、不義は御法度ごはつとだの、義理人情というニセの着物をぬぎさり、赤裸せき々な心になろう、この赤裸々な姿を突きとめ見つめることが先ず人間の復活の第一条件だ。そこから自我と、そして人性の、眞実の誕生と、その発足が始められる。

日本国民諸君、私は諸君に日本人、及び日本自体の墮落を叫ぶ。

日本及び日本人は墮落しなければならぬと叫ぶ。

天皇制が存続し、かかる歴史的カラクリが日本の観念にからみ残って作用する限り、日本に人間の、人性の正しい開花はのぞむことができないのだ。人間の正しい光は永遠にとぎされ、真の人間の幸福も、人間的苦悩も、すべて人間の真実なる姿は日本を訪れる時がないだろう。私は日本は墮落せよと叫んでいるが、実際の意味はあべこべであり、現在の日本が、そして日本の思考が、現に大いなる墮落に沈^{ちんりん}淪しているのであって、我々はかかる封建遺制のカラクリにみちた「健全なる道義」から転落し、裸となつて真実の大地へ降り立たなければならぬ。我々は「健全なる道義」から墮落することによって、真実の人間へ復帰しなければ

ならない。

天皇制だの武士道だの、耐乏の精神だの、五十銭を三十銭にねぎる美徳だの、かかる諸々もろもろの二セの着物をはぎとり、裸となり、ともかく人間となつて出発し直す必要がある。さもなければ、我々は再び昔日の偽瞞の国へ逆戻りするばかりではないか。先ず裸となり、とらわれたるタブーをすて、己れの眞実の声をもとめよ。未亡人は恋愛し地獄へ落ちよ。復員軍人は闇屋となれ。墮落自体は悪いことにきまつているが、モトデをかけずにホンモノをつかみだすことはできない。表面の綺麗きれいごとで眞実の代償を求めるところとは無理であり、血を賭かけ、肉を賭け、眞実の悲鳴を賭けねばならぬ。墮落すべき時には、まっとうに、まっさかさまに墮おちねば

ならぬ。道義頹廢、混乱せよ。血を流し、毒にまみれよ。先ず地獄の門をくぐつて天国へよじ登らねばならない。手と足の二十本の爪つめを血ににじませ、はぎ落して、じりじりと天国へ近づく以外に道があろうか。

墮落自体は常につまらぬものであり、悪であるにすぎないけれども、墮落のもつ性格の一つには孤独という偉大なる人間の真相が厳として存している。即ち墮落は常に孤独なものであり、他の人々に見すてられ、父母にまで見すてられ、ただ自らに頼る以外すべに術のない宿命を帯びている。

善人は気楽なもので、父母兄弟、人間共の虚しい義理や約束の上に安眠し、社会制度というものに全身を投げかけて平然として

死んで行く。だが墮落者は常にそこからハミだして、ただ一人曠こ野うやを歩いて行くのである。悪徳はつまらぬものであるけれども、孤独という通路は神に通じる道であり、善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや、とはこの道だ。キリストが淫売婦いんばいふにぬかずくのもこの曠野のひとり行く道に對してであり、この道だけが天国に通じているのだ。何万、何億の墮落者は常に天国に至り得ず、むなしく地獄をひとりさまようにしても、この道が天国に通じているということに變りはない。

悲しい哉、人間の真相はここにある。然り、実に悲しい哉、人間の真相はここにある。この真相は社会制度により、政治によつて、永遠に救い得べきものではない。

おぎぎがくどう
尾崎 弔堂

尾崎 弔堂は政治の神様だというのであるが、終戦後、せかいれ世界

んぽうろん

聯邦論 ということを唱えはじめた。彼によると、原始的な人間

は部落と部落で対立していた。明治までの日本には、まだ日本という觀念がなく、藩と藩とで対立しており、日本人ではなく、藩人であつた。そこで非藩人というものが現れ、藩の対立意識を打破することによつて日本人が誕生したのである。現在の日本人は日本人で、国によつて対立しているが、明治に於ける非藩人の如く、非国民となり、国家意識を破ることによつて国際人となることが必要で、非国民とは大いに名誉な言葉であると称している。これが彼の世界聯邦論の根柢で、日本人だの米国人だの支那人だのと區別するのはなほ尚原始的思想の残りに憑かれてのことであり、

世界人となり、万民国籍の区別など失うのが正しいという論である。一応傾聴すべき論であり、日本人の血などと称して後生大事にまもるべき血などある筈がない、と放言するあたり、いささか鬼気を感じしむる凄味すじみがあるのだが、私の記憶に誤りがなければ彼の夫人はフランス人の筈であり、日本人の女房があり、日本人の娘があると、却々なかなかこうは言いきれない。

だが、私は敢てあえ罵堂に問う。罵堂いわ曰く、原始人は部落と部落で対立し、少し進んで藩と藩で対立し、国と国とで対立し、所詮しよせん対立は文化の低いせいだというが、果して然りや。罵堂は人間という大事なことを忘れているのだ。

対立感情は文化の低いせいだというが、国と国の対立がなくな

つても、人間同志、一人と一人の対立は永遠になくならぬ。むしろ、文化の進むにつれて、この対立は激しくなるばかりなのである。

原始人の生活に於ては、家庭というものは確立しておらず、多夫多妻野合であり、嫉妬しつともすくなく、個の対立というものは極めて稀薄きはくだ。文化の進むにつれて家庭の姿は明確となり、個の対立は激化し、尖鋭化する一方なのである。

この人間の対立、この基本的な、最大の深淵を忘れて対立感情を論じ、世界聯邦論を唱え、人間の幸福を論じて、それが何のマジナイになるといふのか。家庭の対立、個人の対立、これを忘れて人間の幸福を論ずるなどは馬鹿げきつた話であり、然しかして、

政治というものは、元来こういうものなのである。

共産主義も要するに世界聯邦論の一つであるが、彼等も人間の対立に就て、人間に就て、人性に就て、罅堂と大同小異の不用意を暴露している。蓋し、^{けだ}政治は、人間に、又、人性にふれることは不可能なのだ。

政治、そして社会制度は目のあらい網であり、人間は永遠に網にかからぬ魚である。天皇制というカラクリを打破して新たな制度をつくつても、それも所詮カラクリの一つの進化にすぎないこともまぬかれがたい運命なのだ。人間は常に網からこぼれ、墮落し、そして制度は人間によつて復讐される。

私は元来世界聯邦も大いに結構だと思つており、罅堂の説く如

く、まもるに価する日本人の血など有りはしないと思っているが、然し^{しか}それによつて人間が幸福になりうるか、人の幸福はそういうところには存在しない。人の眞實の生活は左様^{さよう}などころには存在しない。日本人が世界人になることは不可能ではなく、実は案外簡単になりうるものであるのだが、人間と人間、個の対立というものとは永遠に失われるべきものではなく、しかして、人間の眞實の生活とは、常にただこの個の対立の生活の中に存しておる。この生活は世界聯邦論だの共産主義などというものが如何^{いか}ように逆立ちしても、どう^な為し得るものでもない。しかして、この個の生活により、その魂の声を吐くものを文学という。文学は常に制度の、又、政治への反逆であり、人間の制度に対する復讐であり、しか

して、その反逆と復讐によって政治に協力しているのだ。反逆自体が協力なのだ。愛情なのだ。これは文学の宿命であり、文学と政治との絶対不変の関係なのである。

人間の一生ははかないものだが、又、然し、人間というものはベラボーなオプチミストでトンチンカンなわけの分らぬオツチヨコチヨイの存在で、あの戦争の最中に、東京の人達の大半は家をやかれ、壕ごうにすみ、雨にぬれ、行きたくても行き場がないよとこぼしていたが、そういう人もいたかも知れぬが、然し、あの生活に妙な落おちつき付と訣別けつべつしがたい愛情を感じだしていた人間も少くなかった筈で、雨にはぬれ、爆撃にはビクビクしながら、その毎日を結構たのしみはじめていたオプチミストが少なくなかった。私

の近所のオカミサンは爆撃のない日は退屈ねと井戸端会議でふもらして皆に笑われてごまかしたが、笑った方も案外本音はそうなのだと私は思った。闇やみの女は社会制度の欠陥だと言うが、本人達の多くは徴用されて機械にからみついてた時より面白いと思つているかも知れず、女に制服をきせて号令かけて働かせて、その生活が健全だと断定は為しうべきものではない。

生々流転、無限なる人間の永遠の未来に対して、我々の一生などは露の命であるにすぎず、その我々が絶対不変の制度だの永遠の幸福を云々うんぬんし未来に対して約束するなどチヨコザイ千萬なナンセンスにすぎない。無限又永遠の時間に対して、その人間の進化に対して、恐るべき冒瀆ではないか。我々の為しうることは、

ただ、少しずつ良くなれ、ということ、人間の墮落の限界も、実は案外、その程度でしか有り得ない。人は無限に墮ちきれるほど堅^{けんろう}牢な精神にめぐまれていない。何物かカラクリにたよつて落下をくいとめずにいられなくなるであらう。そのカラクリを、つくり、そのカラクリをくずし、そして人間はすすむ。墮落は制度の母胎であり、そのせつない人間の真相を我々は先ず最もきびしく見つめることが必要なだけだ。

青空文庫情報

底本：「墮落論・日本文化私観 他二十二篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年9月17日第1刷発行

2013（平成25）年4月5日第6刷発行

底本の親本：「坂口安吾全集 04」筑摩書房

1998（平成10）年5月22日

初出：「文学季刊 第二号（冬季号）」

1946（昭和21）年12月1日

入力：Nana ohbe

校正：酒井裕二

2015年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

墮落論〔続墮落論〕

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>